

エコー・ブックス

遺書

白少女

落合恵子



エコブックスは、粹などにはま
らず自由にのびのび行動する筈のよ
うに、現代の若いエネルギーを引き
出し、未来への希望を育てそして生
きる勇気と自信を見いだそうとする
ものです。

訝（エコ）が山や谷に響くよう
に、あなたからのご意見の反響を期
待します。

あなたと私たちで創るエコブッ
クスです。

エコブックス編集部

遺書 白い少女

昭和50年11月20日 初版発行
昭和50年12月10日 二版発行

著 者 落合 恵子
発行者 加納 勲
発行所 株式会社 勁文社

〈検印省略〉

東京都新宿区西新宿 7-2-5
電 話 (369) 0271 (代表)
振 替 東京 9-13311

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 明光製本株式会社

落丁・乱丁は本社でお取替えいたします 0293-505805-1839
定価はカバーに表示してあります。©1975 Keiko Ochiai Printed in Japan

エコブックス

遺書

白い少女

勁文社

ミネオが 死んだ。

彼は

わたしの 恋人だった。

彼は

わたしの 夫だった。

そして

すべての意味において

彼は

わたしの 教師だった。

彼は

わたしに

彼の生命いのち そのものを

吹き込んで

そうして：

死んでいった。

わずか

二十四歳と三カ月。

美しい 五月の まったただなかで

遺書 白い少女

目次

第一章

彼 7

第二章

タンカの音が聞こえる!! 49

第三章

白い日々……軽井沢にて 109

第四章

『生きる……限りある今日のなかで』
157

第五章

最期の結婚式
191

終章

『遺書』わたしは泣かない
221

あとがき
240

カバーデザイン 中野 智雄

本文イラスト はっとりかずお

第一章

“彼”

五月

ミネオと初めて出合ったのは、風の中に、かすかに夏の匂いをかぎわけた五月の夜だった。

五月の闇のなかには、濡れ濡れに光る青葉の少々セクシーな香りと、若い獣めいた荒々しく野性的な息苦しい匂いだが、奇妙に混り合って溶けていた。

開き始めたくちなしのむせかえるような香りでいっぱいの神宮外苑の道を抜けて、わたしは青山に急いでいた。

その夜、わたしは何人かの遊び仲間たちと、たまり場の青山の深夜スナックで、パーティを開くことになっていた。

わたしの十九回目の誕生パーティというやつだ。

青山学院のすぐそばにあるビルの地下にあるスナックの扉をあけると、クラッカーが打ち上げられ、紙吹雪が散り、手に手にグラスをもった仲間たちが口々に「おめでとう」を連発して、わたしを抱え込んだ。

世の中の習慣だの、大人たちの考え出した道徳や常識などというやつを頭っから軽蔑してる仲間たちも、今夜だけは、いとも月並みな「おめでとう!!」の言葉をわたしに浴びせかけては、わたしをあきれさせたり、おかしがらせたりする。

……なにがめでたいものか……。

望まれ、祝福されてこの世に生を享け、両親の愛の中でヌクヌク育った坊ちゃん、嬢ちゃんにとつては、誕生日は、なるほど、めでたくもありがたい、我らが幸せの再確認の日ということになるかもしれないけれど……。

第一、この世に生まれ出ることじたい、本当に人間にとって、めでたいことなのか、幸せなのか不幸せなのか……もう一度、じっくり考えてみるがいい。

よっぽどの楽道家か果報者を除いて、ほとんどの人間にとって、オギャーと呱呱ニャニャの声をあげたその日が、たぶん、これから始まる不幸の洗礼を受ける第一日目、いまわしくもおどろおどろしい人生の第一関門ということになるはずだ……。

今朝、ママは……といっても彼女にとつての朝は、いつも午後一時過ぎなのだが……わたしにクリスチャン・ディオールのディオリッシモの香水の大ビンと、一万円札数枚を手渡した。これが彼女流の一人娘の誕生日の祝い方なのだ。

毎年そうだった。違ったことといえば、今年は「十九歳なのね。あんたの年には、わたし、あんたを生んでいたわ」という言葉をくれたぐらいだ。

ママは、銀座でも一等地といわれるみゆき通りに、二十坪余りのクラブをここ十八年間経営している。

クラブの名は「亜砂」。わたしの名前、亜砂子からとったわけだけど、本人のわたしにとっては、余り愉快なことじゃない。

父親はいない。別にそんなこと詮索したいとも思っていないのに、周囲の心やさしく、好奇心に富んだおせっかいな人々は、ご丁寧にもいろんな噂話をわたしの耳に吹き込んでくれる。どうもわたしは、かなり有名な財界人ジュニアの落とし胤だねということらしい。

噂では、ママの昔の恋人、つまりわたしの父親なる人物は、ママと別れる時に手切れ金と、わたしの養育費がわりに、ママに銀座の店を買い与えたようだ。

これが銀座の夜の世界では、今もって語り草になっている「亜砂」のママの昔話ということだ。

おかげでわたしは、酔った客が落としていった酒と欲望の匂いのする金をたっぷり養育費に使わせてもらって、身長百六十センチ、体重四十五キロ、ゼイ肉なし、きわめて健康、精神状

態いくぶん不健康、ソーウツ、ヒステリー気味の、強情で小生意気な娘に成長していた。

誕生日パーティの顔ぶれはといえば……。

プレイボーイと評判の……もつともわたしに言わせれば、彼はただ女にやたら意地汚いだけののだが……有名なバンドのベースマン。

二代目のお人良しかげんを絵に書いたような、われわれ仲間の遊び資金担当の、銀座の老舗の次男坊主。

お嬢さん学校で有名な某女子大英文科で、英文解釈や文学史のかわりに、ボーイハント術をもっぱら研究中のグラマーな女子大生。

彼女の目下の恋人、どこかしらホモっぽいヘアデザイナー。

虚栄心だけは一流だけど、売れてないモデル嬢。

原宿に小さなブティックをもってる、世にいう青年実業家なる男。

そして、銀座のクラブのひとり娘、高校を卒業してから、毎日、ブラブラ遊んでくらしてる、このわたし。

みんな、もちろんわたしも含めて、口ばかり達者。世の中を斜めどころか、逆立ちして見て

るような、そのくせ、てんで実行力なんて持ち合わせてない、軽薄で、いやらしいスネッカジリ族ばかりだった。

一丁前に、批判精神だけは旺盛で、頭でっかちなひ弱な若者たち。

しらけて開き直ることだけが、その頃のわたしたちの唯一の自衛手段であり、武器でもあったのだ。

「誕生日の感想はどう？」と女子大生。

「十九よ。花の命もあと一年。もうすぐ、ばばあだわ」

「亜砂子のばああ第一歩を祝して、カンパーイ!!」

みんな酔っていた。わたしはといえば、グラスを重ねれば重ねるほど、しらけた気分になっていた。

薄気味悪い少女趣味など、とっくの昔にドブにでも棄ててしまったはずなのに、誕生日だけは妙に感傷的になってしまふのだ。わたしは、嬌声をあげながらアイスボックスの氷のカケラを隣りの人へと順番に口移しに渡していくゲームをはじめた仲間たちから離れ、八杯目のカンパリソーダをのんでいた。

……いつまでこんな生活が続けていくのだろうか。ある朝、突然、鏡の中に、もう決して若くはない自分の顔を見つけて、愕然とするのだろうか……。

「荒れてるの？」

背後から声をかけられた。

ふり向くと、こげ茶のシャツにベージュのストレート・ジーンズをはいた、男というよりは、片足はまだオトコノコの世界から抜け切っていないような青年がひとり、微笑みながらわたしを見おろしていた。

この店で、以前に何度か見かけたことのある顔だった。その頃のわたしは、人に出会うとすぐ、その人間が自分と同じ匂いを持った同胞かどうかをかぎわかる嗅覚を誇っていた。今、白い歯をみせて笑いかけている青年は、確かに今までのわたしの遊び仲間とは違った匂いを持っている。

彼は仲間たちのように、睡眠不足と運動不足、飽食と、酒やタバコ、自堕落な生活を証明する不健康に黒ずんで荒れた肌も、無感動な目も、人を見下すような、皮肉っぽい目付きもしていなかった。

「メロドラマのヒロインなんてごめんよ」

「カワイイコだと思っていた」

「ありがとう。でも、そんなテで女のコを誘惑しようなんて、あなた修行不足よ」

「心配いらない。ボクは君のようなプチブル的ジャジャ馬娘を手なずけるほど、時間も金も余裕もないから」

「わたしだけに名のらせるの？」

「オレ、ミネオ。二宮峯男にのみやって書くんだ」

彼はコースターの上にボールペンで自分の名を書いてみせた。

「そう、いい名前ね。少女漫画にでてくるモテモテ少年みたい。なにやってる人？」

「さし絵描いてる人だよ」

「イラストレーター？」

「まあな。でもオレ、イラストレーターとか、スタイリストとか、ディスクジョッキーとか、横文字の仕事をしているやつ、なんとなく信用できないんだな。軽薄でさ、いかにも時代の先端をいつてる風で、そのくせマスコミずれしてて、中身からっぽって感じでさ。だから、オレは、さし絵屋。それがいいんだ。君は、なにしてる人？」